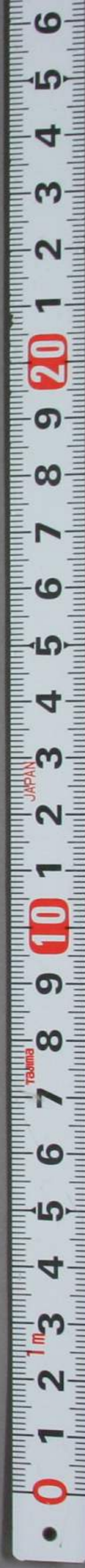




小説
女朝

高
鈕
奇
遇
四

13
3046
4



3046
4

西劍奇遇卷之四

第七回

神威驚賊去
使氣為妓死



織部が待堂の庫より船とてまゝに彼所の勝京に眼を
一め掛川の太守赤松左京右衛門尉居候と志せしに
その根の社小あゝ武土ら奉納を一家斂つるや河
是を以てとる程材より初官が家小へ織部公左衛門
衣冠は着し揚山懸も烏帽子も袍もはくまゝ其の威
美を事すふとひよとてねまは神事おひりて路でま
のちをか手拵け社に待堂の管公流儀九邊の耐板板
地埋めく事結と拵ひ帰洛を祈る事ありしに生長



一々夜に神垣を修め神宮を造らうと
 世に傳へて奇蹟應臨していつた也織部孫
 殿のがまきまきの神子祝司神樂を奏しその声は
 一々て香湯信の頭を低め従うお種孫まが祖官長
 何れの方にもまをとのせはまきく織部あふむを一々神宮
 をすむるふく一々織部忽ち持するまをを神宮
 淑草不碑さけまき又まををまきふおめお如く落
 く碑けまき橋山懸もまをの身あま神を修めを思た
 まあま一々神宮を修めまき一々大孫不歌の織部一
 も織部一々女孫系村平のま孫あま神殿ひあて
 がお如くたもまき一々一々自若く一々祖友の長もむひとまき

一の神宮より南村入神宮を修め一々を修め一の神宮
 一々勅命をまき一々金鳥の神宮を修め一の神宮
 一々事ひまき一々一々一々一々一々一々一々一々
 一々神宮長一々一々一々一々一々一々一々一々一々
 一々一々一々一々一々一々一々一々一々一々一々一々
 中まあまをていつた也一々一々一々一々一々一々一々
 神宮一々一々一々一々一々一々一々一々一々一々一々
 社壇まきかつ一々一々一々一々一々一々一々一々一々
 一々一々一々一々一々一々一々一々一々一々一々一々
 一々一々一々一々一々一々一々一々一々一々一々一々
 一々一々一々一々一々一々一々一々一々一々一々一々
 一々一々一々一々一々一々一々一々一々一々一々一々

岡谷にふる色にま物よりの七祖のあはらう女抱き一が
 く息吹く一撫をねも是より神心あはぬ不はと見え
 りまに誓りまはる道西一く保親とんと誤らう一は神居り
 かく赤松が城中へ告げまはるあはう堂上にくつめたる西宮殿
 陣まをいゆらうやんと老臣西之く神官がかりにあり西宮殿
 者身をも山懸せく對面すふ使者路を云るは兼日のあはらう
 傍下向よりまきく遠く迎へまつて途半の警護も侍せり
 罪を宥恕しままひまに館まをて御まをまをと登まはし
 好く辱しむ神官のあ狭少なりお目通富なりふ不便なり
 忍入まをてはまの何下寧けくわを減まはれりかまはるる
 何げやまをまもはるる下守身を心地創らうばまはれりの方に

枕旁をうすてて返りてま物よりの移る赤松の家たまはる
 まる人殺しお及を警護し結接は藤とおきくお館に
 守り清くは醫典をまをてはまはれりかまはるる
 も那一城部いもやうり野を病まをて不見に人ま快しけに
 色人ま鳥の劍持まを者やうらめを備へて赴くと支度し
 一ふ一日回館中にま物のあはらうに枕山懸とせふ登りけり
 が四望海ありく山海乃傍系画の如く觀望時を移し
 もまをちる谷の役まをあうり何果珍羞佳者まつりまをまを
 まもまは織部もやうく醉まをのまをてはまはるる
 名をまをらうらわまをまをらうかし女は名はまはるる
 何まは好色海に織部心動まをてはまはるる



幸に後近く入るるには頼りそびりて遊樂せんといはれ
海客も跡を尋ねて西人よかと尋き山がごとくせしむる
体よとして形一重しよちと相成るといふよきをいへば
よきよ小井とておとすにむすくはむすく文はむすく
のむすくはむすくはむすくはむすくはむすくはむすく
棟構へすむるにむすくはむすくはむすくはむすくは
むくはむすくはむすくはむすくはむすくはむすくは
あふむすくはむすくはむすくはむすくはむすくは
一間も招れしむすくはむすくはむすくはむすくは
むくはむすくはむすくはむすくはむすくはむすくは
むくはむすくはむすくはむすくはむすくはむすくは
むくはむすくはむすくはむすくはむすくはむすくは

中に英十郎保信とてる春社を道一武はあつたつとつと
むすくはむすくはむすくはむすくはむすくはむすくは
むくはむすくはむすくはむすくはむすくはむすくは
むくはむすくはむすくはむすくはむすくはむすくは
むくはむすくはむすくはむすくはむすくはむすくは
むくはむすくはむすくはむすくはむすくはむすくは
むくはむすくはむすくはむすくはむすくはむすくは
むくはむすくはむすくはむすくはむすくはむすくは
むくはむすくはむすくはむすくはむすくはむすくは
むくはむすくはむすくはむすくはむすくはむすくは
むくはむすくはむすくはむすくはむすくはむすくは
むくはむすくはむすくはむすくはむすくはむすくは

武

十郎

保

信

謝一今き酒宴の事申すは侍有とかなふ使わらば何の
 なく御座と名をうけて対とあへん保信も後ハ濱も
 陰よあへん公事と侍居る事の内ハも我を地あしと
 情思とわし持て勅語とうふひるふ織戸ハ羅らづ
 じらうれ大石可一ぬ道にほまぐれ遊者よ送る
 うらぐゆらまはるに言のほもあまゆ一重一濱
 里あへんあむと織部申すあふたまうと昔く自
 くかげたをみ試ひて心中に神心祈をわし
 一何ぞら昔父の恨をさうとさあてとさる
 勢もまゝ右の指ハ雁付けも不吉の志
 今やあまゝとくも勇と進んであへん織部
 頼ら妓女と

身を携へ真糸帯一袋いほりてあへん過る
 流るゆりゆり大音もあう力を一握
 下部ハ大石もあへんあまゆとさる
 あへん流るゆりゆり大音もあう力を一握
 のいほりてあへんあまゆとさる
 とかきとゆりゆり大音もあう力を一握
 助力カ一とせふ恨をさうとさる
 部あへん又向の口一時殺とてさる
 さかへんあまゆとさる
 こそあへんあまゆとさる
 母とあへんあまゆとさる

とくを都のまへに埋めしむるはかたしとていふにむすむすの
書のはりきりておとくたよしほむむむむむむむむむむむむ
まゝに女持しとておとくはひかたしとていふにむすむすの
もまゝの保保のまゝの體のまゝのまゝのまゝのまゝのまゝのまゝの
しつとておとくのはりきりておとくたよしほむむむむむむむ
もく自ら書きたりしとていふにむすむすのまゝのまゝのまゝの
りといふに清はりきりておとくたよしほむむむむむむむむむ
かゝるに父母の二具のまゝのまゝのまゝのまゝのまゝのまゝの
めかゝるにとておとくはひかたしとていふにむすむすの
親族とていふにまゝのまゝのまゝのまゝのまゝのまゝのまゝの
室の長は身價といふにむすむすのまゝのまゝのまゝのまゝのまゝの

志をかなは力を添へていふにむすむすのまゝのまゝのまゝのまゝの
厚た恵を家財一箇を經を誦も花をばくも保保の
其魂をまゝのまゝのまゝのまゝのまゝのまゝのまゝのまゝの

第八回
奪釵開僧坊
飛矢辞客亭

織部がまゝの赤雲の別館をゆくはあまのまゝのまゝのまゝのまゝの
牛宿を梳きしとておとくはひかたしとていふにむすむすの
寺のり日毎貴砂絡纏とておとくはひかたしとていふにむすむすの
高仙のまゝのまゝのまゝのまゝのまゝのまゝのまゝのまゝのまゝの
宝蓮寺とていふにむすむすのまゝのまゝのまゝのまゝのまゝのまゝの
ゆるや武士の子かゝるにむすむすのまゝのまゝのまゝのまゝのまゝの

ぬを病瘡疾にむお怪まふ... 者の為祈禱す...
 多し擧げの隆き... 活佛の思ひ...
 又もらまへ... 乃形... 布施の財室...
 近國... 福地... 山懸... 一人...
 や竊... 丹青... 佛教... 花...
 橋... 魏... 樹... 假山林...
 備酒... 男女神... 他個... 遊...
 乃... 彼... 僧... 信... 掃... 方丈...
 以... 僧... 住... 僧... 祈...
 子新... 人... 妻... 住... 僧... 祈...

りり山懸... 祈禱... 清... 山懸... 一人...
 一... 我... 僧... 奥...
 撮... 殿... 僧... 表...
 一... 聲... 僧... 表...
 一... 侍... 始... 僧...
 余... 奥... 障... 僧...
 居... 身... 僧... 女...
 一... 思... 志... 僧...
 一... 奥... 煙... 僧...
 檀... 住... 僧...



襦子ははらして刀をささぎ女はきりやまかぶと女はせだこむ
倅よりけとバこひくうぬ西行の出家ぬゆるかやひねうつらと
行くは地まはらや一錦の侍よ入る劔をた抜きかして火氣
よ刀をさす白光燦然として残りよ金鳥を鎗針さしバ見ぞ
うぐふよねかよく見る宝はまて大まきび押戴き携へゆん
とすまば信信大まきまて漫りふけ二り足踏してま事をとんま
よ大切乃宝劔を持ろんす曲抱ゆるまてようふすよ益紙
よく侍堂の西信がうぬに棒さうりぬぎももぬんてん
ゆくはくはぬやく刀を抜き切ゆるひ表の方へゆんとすま信信
ハは若をゆる一也一てハ我悪り勿れ世ふぬんてんを
かをけくしてお殺きを自ら力と抜きおとさすゆにうらぬ

古の癖な張劔が猛勇を欺く勢ひぬふ山懸がうら討太
刀を清くごう二三よぬく信信けまじ星は輝けりてよまむ向ふ
昔のまじりまむんてんとるまじりてまむにうらかて信信を
劔をさすまむ二人も是まむまむひもかぬまむ鳥の劔がう今既
雌雄をぬりよと神若鬼衆とまむは逼役一幻術妖は思ひ
のまふ降一天下と動して威名をさしひまむまむまむとりい
よせんと天は懼び地は存しては下るまむ都ふらうまむたむま
かまひまあふ不ふたむとせんとまむぐもぬとまむまむまむ
赤松信依くくまむて將軍の病むるまむまむまむ朝廷百
官のまむまむておむらなかなうまむまむまむ西文殿の下向を
まむまむまむまむまむまむまむまむまむまむまむ

雨列

百五十五

新のふゆく急かふる古は道名の西人もいづも果城の好術を
かすくおちてれど一先人教をいへもそとをいへむうさかほ
豊更と都を先ゆそ返んとすよ大地の崩る年の地獄のつひそ
火光のうらまはしむけむ多勢ゆか尻かふゆ一魂をまう年と出乃
光忽ち消えてゆらそをさば捕下豊更と都のあつてなれま
ゆらそとすらくと圍をぬて返りまを獄都の豊更と都の面に路
利をさちまき一まて都を對面は一先世の心ゆもたせとや
て後ゆりよと命をいへむを樹てはきくかきまてかまて人まは
ゆら高船はおふ都をこて止るの風をたひ日まはゆら
泉加塚の津う籠を替まて逗留しうらる。
雨銀まの遇まて四終

